

本 部 企 画

〈シンポジウム〉

『生』に寄り添う社会福祉 ～誰一人取り残さないソーシャルワーク～

＜コーディネーター＞

社会福祉学部講師 新 藤 健 太

＜シンポジスト＞

つくば市福祉部社会福祉課 / 社会福祉学部 57 期 2017 年卒業 / 本学社会福祉学会評議員 染 倉 有 希
東日本少年矯正医療・教育センター / 大学院福祉マネジメント研究科（専門職大学院）17 期 2022 年修了 天 宮 陽 子
入管収容問題を考えるソーシャルワーカーネットワーク / 通信教育科精神保健福祉士短期養成課程 18 期 2018 年修了 杉 山 聖 子

新藤 皆様おはようございます。新藤と申します。このシンポジウムのコーディネーターをさせていただきます。大学では精神保健福祉士の養成や、社会調査関係の授業を担当させていただいております。専門はプログラム評価でございまして、色々な分野の新しい仕組みづくりなどに携わっております。宜しく願いいたします。

それでは、シンポジストの皆様を簡単に御紹介させていただきます。

つくば市福祉部社会福祉課 / 学部 57 期卒業生の染倉様です。一言お願いします。

染倉 おはようございます。社会福祉学部 57 期卒業の染倉です。貴重な日曜日のお時間にご参加いただきありがとうございます。

新藤 続きまして、東日本少年矯正医療・教育センター / 専門職大学院 17 期修了の天宮様です。

天宮 おはようございます。今日は短い時間ですがどうぞよろしくお願いいたします。

新藤 続きまして、入管収容問題を考えるソー

シャルワーカーネットワーク / 通信教育科精神保健福祉士短期養成課程 18 期修了の杉山様です。

杉山 おはようございます。杉山と申します。今日は皆さんにお話する機会をいただいて本当にうれしく思います。なかなか機会がない問題なので、短い時間でどこまでお伝えできるかわかりませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

新藤 ありがとうございます。今日はこの 4 人でお届けしたいと思います。

本日の進め方は、5 分程度の趣旨説明をさせていただき、その後、シンポジスト発表を各 20 分、質疑応答を 10 分、その後に全体討論としていきたいと思います。

まず、趣旨説明です。テーマが、『生』に寄り添う社会福祉～誰一人取り残さないソーシャルワーク～ということで、今、この「誰一人取り残さない」というのは、実はソーシャルワークだけでなく、色々な所で話題になっているスローガンです。なぜなら、皆様御存じの通り、これが SDGs のコンセプトになっているからです。SDGs について簡単にご説明いたします。2015 年 9 月、

国連持続可能な開発サミットで全会一致により採択された 2030 アジェンダ（持続可能な開発のための 2030 アジェンダ（*Transforming our world : 2030 Agenda for Sustainable Development*））の中に盛り込まれています。国際社会全体が、人間活動に伴い引き起こされる諸問題、例えば、地球環境の問題、先ほど炭谷先生のお話にございましたが、こうした諸問題を認識し、共同して解決に向けて取り組んでいく決意を表明した画期的な合意でございます。この決意の文章には、「我々の世界を変革する（*Transforming our world*）」と名づけられております。これまでと異なる決意を持って採択されています。この 2030 アジェンダの基本コンセプトが「誰一人取り残さない（*No one will be left behind*）」という言葉に集約されています。そしてこのコンセプトを分野別にまとめたものが、SDGs（持続可能な開発目標）で、17 の目標が設定されています。これらの詳細はインターネットなどでご確認いただきたいと思います。この 17 の目標は、社会福祉・ソーシャルワークに関わるものが沢山あります。例えば、1 つ目の目標は、貧困をなくそう。3 つ目は、全ての人に健康と福祉を。5 つ目は、ジェンダー平等を実現しよう。8 つ目は、働きがいも経済成長も。そして今日もお話しがありますが、10 は、人や国の不平等をなくそう。11 は、住み続けられるまちづくりを。16 に平和と後世を全ての人に。このように、先ほど申し上げました通り、これ以外にも環境問題、実は社会福祉・ソーシャルワークと深い関係があるわけです。本日は、この SDGs の基本コンセプトである「誰一人取り残さない」を絡めて、ソーシャルワークの在り方について検討してみたいと思います。

フロアの皆様とやり取りをする時間が十分に取れませんが、私たちの議論を聞いて、皆様それぞれの実践や研究に絡めてこのテーマを考えていただければうれしいと思います。

それでは、これから各シンポジストの皆様の報

告に入りたいと思います。

第一報告は、染倉様をお願いしたいと思います。

染倉 スライドを使いながら説明させていただきます。まず、お断りですが、今回の講演内容は私個人のことで、必ずしも組織の立場ではないということをご理解いただけたらと思います。社大の一卒業生として、今の業務内容や取組についてお話しさせていただくので、組織の考えとは必ずしも一致しないという所は予めご了承下さい。また、講演内容や資料について分からないことがあれば、この後しばらく会場におりますので、直接、私個人に聞いていただけたら、ありのままにお話します。宜しく願いいたします。

続いて、簡単な私のプロフィールです。

平成 29 年に、社大の社会福祉学部福祉計画学科を卒業し、新卒で茨城県のつくば市に入職、最初の部署は地域包括支援課に入りました。高齢者支援の部署になります。私は高齢者虐待や、成年後見、また委託で地域包括支援センターの運営管理を担当しておりました。

令和 3 年からは社会福祉課に異動となり、生活保護のケースワーカーを任命されております。自分のソーシャルワークの原点は、大学生活がスタートラインになっているので、大学生活の頃からお話しさせていただきます。私は社大の寮生でした。会場やオンラインで参加されている方の中には、寮生の方がいると思います。学生寮は自分たちで運営をしていかなくはならず、一人部屋ではなく先輩との 2 人暮らし。「誰だ？この人」というところから一緒に暮らしていくのは、高校を卒業して最初にインパクトが強い経験ができたと思います。今はエアコンがあると聞いていますが、当時はエアコンがなかったので、生活保護の話にもつながりますが、寮生同士でこれは絶対的貧困なのではという話をした記憶があります。寮で使う電気代や水道代は、自治寮なので、寮生が寮生から集めていました。中には期日内に納めな

い人もおり、なんで払ってくれないのと直接話していました。今は口座振替になっていると聞きましたが、当時は口座振込でしたので、一人一人が振込手続きをしていました。寮食は、生協が入っており、それも未払いが溜まり、回収や負債を少しずつ減らしていく取組をした記憶があります。滞納というのは、単純にだらしがないからではなく、その背景には事情があるパターンもあると思います。そうした事情を踏まえつつ、少しずつでもいいから払っていこうよと、最大限配慮をしながら未収金の回収を行っていました。サークル活動も沢山していました。今は、コロナ禍でサークル自体がなくなっているところも多いと聞いていますが、ボランティアサークル、運動系サークル、その他のサークルと、最大で12のサークルに所属していました。今回の発表に当たって思い出しましたが、なぜそうなったのかというと、せっかく面白いとか興味があるなと思ったのに、やらないのはもったいない、という精神でまずは参加していました。中には、入ってすぐやめたサークルもあり、申し訳ない事をしたとは思いつつも、色々なサークルの人と顔が繋がれたことは、とても良かったと思っています。最終的には、8サークルに残留したので残っていた方かなとは思いますが。その中で、特に記憶に残っているのは、今回の学内学会でも「復興カフェ」として参加しているCocoaです。東日本大震災の被災地の一つである気仙沼の児童館を中心に、レクリエーションを企画していました。社大は、ボランティアを推進している所があると思い、大学でボランティアをする学生支援をしてほしいと、大学内で調査をして学内学会で調査結果を報告しました。詳細を話すと長くなりますので、「社会事業研究」の56号を見ていただけたらと思います。過去の「社会事業研究」を読むことも面白いので、ぜひ閲覧してもらえたらと思います。そして、それがつながったのか、研究棟3階にボランティアセンターができ、ボランティアをしたいけど、どうしたらいい

のかと思っている方がいましたら、職員が週3回いると思いますので訪ねてもらえればと思います。使わないと無くなります。なので使ってください。これから継続していくためにも宜しくお願いします。余談でした。

続いて、オープンキャンパス委員にもなりました。オープンキャンパスにきた受験生や保護者に対して、大学の魅力を、大学の教職員ではなく学生だからこそ伝えられる良い機会だったと思います。自分の思いをのせて社大の魅力を言葉で表現することは面白く、言語化することは難しかったのですが、面白さと難しさを経験できました。3つ目は、たんぼぼというサークルです。清瀬市内に明治薬科大学、国立看護大学校という医療系大学があり、なかなか一緒に考えたりする機会がないと思い、同じ学年の友人や先輩達と一緒にたんぼぼというサークルを立ち上げました。社会福祉を学び、社会福祉だけで問題解決は難しく、薬学や看護など、他の職種と一緒に連携していけたらと思い、多職種連携についてともに考えていました。学内学会でも、多職種連携をどう進めていったらいいのか等、何回か発表しましたので、詳細は「社会事業研究」にて確認いただけたらと思います。その他の大学生活をスライドの写真で紹介します。清瀬市のマスコットキャラクターの写真は、ボランティアで清瀬のお祭りにも参加させていただいたものです。商店街の方と一緒にお祭りを運営する良い経験でした。東久留米の運動会に参加した写真やボランティアバスで被災地を訪問した写真もあります。ボランティアバスでは、自分達が被災地支援として何ができるかと考え、子ども達とのレクリエーションを計画したりしていました。先生方の協力をいただきながら、ボランティアバスで被災地に行かせていただいた事は、資金面も含めてありがたい機会だったと思っています。これは、気仙沼で電車の線路が流され、その代替のBRT（バス高速輸送システム）を見たときの写真や児童館の子ども達との集合写真になり

ます。

続いて、自分の就職活動です。私は、つくば市で仕事についておりますが、最初の就職希望先は社会福祉協議会(社協)、医療ソーシャルワーカー、大学職員を考えていました。社協は、行政(マクロ)でも福祉現場(ミクロ)でもなく中間のメゾだからできる福祉の役割がおもしろいと興味を持ち選びました。医療ソーシャルワーカーは、患者さんの年齢や何が原因で入院してきたのか等、色々な背景のある方がこられるので、自分自身も様々な領域の福祉制度等について、オールマイティになりたいと思い、希望しておりました。最後は大学職員です。社大で4年間過ごしてきた中で、福祉を学ぼうとしている学生の支援は面白いと思い、もっと福祉が面白いことを色々な人に伝えて興味を持ってもらいたい、福祉を学ぶ学生にとって学びやすい環境にしていこうと係わりたく、候補に挙げていました。実際、社大の職員は、最終的には難しかったのですが、最初から行政ではありませんでした。行政は、法律に縛られて、臨機応変に対応ができないのではないかとネガティブな印象がありました。そんな中、なぜ行政を選んだかという、たまたま実家がつくば市で、市の広報誌に社会福祉士の募集があり、両親からの勧めで受けました。最初から行政を受ける予定はなかったので受験対策はほとんどしていなく、学生支援課の支援を受けて、対策本や模擬面接を活用し、最終試験まで突破したので、これはもうやれということだろうと、つくば市に就職することに決めました。つくば市の概略は、人口25万人、高齢化率20%位です。面積は284キロ平米、といってもイメージがつかないと思うので、23区の半分位がつくば市の面積と思っていただけたらと思います。面積が広すぎるので、旧町村にて日常生活圏域を7つに設定していますが、日常生活圏域ごとに人口の比率が違ってきます。北部の筑波地区では、39歳以下の年齢の方が少なく、逆に、荃崎地区は65歳以上の方が多く、荃崎地区だけ

だと高齢化率が38.13%です。最も低い地区は谷田部東地区の12.3%と、地区によって高齢化率に大きく違いがあります。行政の仕事は、地域包括支援課に入りました。総合相談として、高齢者に関する色々な相談を受け、その中で、高齢者虐待の対応や成年後見制度の首長申し立て等をやっておりました。また、つくば市は委託の地域包括支援センターがいくつかあり、センターに対して業務内容の指導や委託料の支払い等も経験しました。そこで、やはり行政は予算をつけて、あるべき姿に近づけていくのが役割なんだとつくづく感じたのがこの部署です。この時の社会福祉士としての悩みについては、社大のホームページに掲載されていますので、もしよろしければ見ていただけたらと思います。

地域包括支援センターでのことです。年金を受給しており、生活保護を受給していない公営住宅に住む高齢の一人暮らしの方が、ADLが落ちて外出が困難なので、数百メートル先のコンビニまでをタクシーで移動するのですが、年金支給日になると、コンビニのATMで手数料を毎回発生させて千円ずつ下ろして生活必需品やタバコを購入し、お金を使い果たした場合は、砂糖水で暮らしていました。その方の支援に入った際に、本人からは、「しゃーないべ(仕方ないでしょ)、おれはこーしたいんだあ(自分はこういう生活でいいんだ)」と言われ、結構悩んだ記憶があります。

続いて、社会福祉課保護係に異動して生活保護のケースワーカーになりました。担当のケースは、約82世帯。82世帯を毎月訪問するわけではなく、生活課題に応じて、毎月行く世帯、2か月毎、3か月毎、4か月毎、半年毎と、訪問の頻度が変わりますが、毎月30世帯を訪問し、必要に応じて生活保護費の計算を行っています。つくば市は、アパート一人暮らしの場合の保護費は、大体10万2,430円になります。生活困窮に至る理由は様々ありますが、就労が可能になり、他の制度を使うことで生活保護を必要としない状態になるよう

なと考えていく。そんな仕事なのかなと思いました。精神保健福祉士資格取得の学びをしているということで、それが終わったら本学大学院でお待ちしております。それでは、私から少し質問をさせていただきますと思います。

今日の発表の中に、ケースワークの難しさと面白さで日々考察とありますが、特に難しさの部分はよく分かりましたが、ケースワークの面白さというのは一体何なのかというものを教えていただけますでしょうか。

染倉 ケースワークの面白さというと、本人に対しての質問や関係性の中で、以前は本人から話されなかった今後の計画の希望などを聞くと、自分を少しずつ信用してお話してくれているのだと、本人の望む生活に少しずつ近づけているのかなということで面白さがあります。生活保護は、結局、生活保護から抜けるというのが最終目標になると思います。それに向けて、本人も生活保護から抜けることは、大変勇気がいると思います。ある意味、生活保護って最後の砦で、最低限の生活が保障されている所から抜けることになるので、今まで安全ベルトがついた状態をいきなり取って自分で歩かなきゃいけない。それに向けて、本人が生活保護を受けないで生活頑張っていきますという話が聞けたときには、本人にそう思ってもらえたのだと面白いなと感じます。

新藤 ありがとうございます。大変なお仕事の中で、私、非常に大事なことを気づかせていただいたんですが、ソーシャルワーカーというのは与えるだけではなくてもらうんだなと。利用者様、被保護者の皆様、クライアントの皆様から信頼されているなと感じたり、あるいは、生活保護から脱却されていくことに、ご自身の自信が高まってきたりすると、ソーシャルワーカーは、もらう仕事なのかなとも思いました。最後の質問ですが、生活保護を受けられる方、経済的な貧困の背景には

人間関係の乏しさというのがあるのではないかと思うのです。特に、今日は、「誰一人取り残さない」というのがテーマです。難しい質問ですが、こうした人間関係の乏しさというのは、どうして生じてしまうのか、ケースワーカーのお仕事から学んだことがあればお聞かせいただきたいと思います。

染倉 人間関係…この質問は難しいと正直思いました。確かに、生活保護に至る前に、制度を知っている友達、他の相談機関、職場の仲間など、生活保護に至る前に相談できたなら何とかなったのかなと思う方も実際にはいます。ただ、今後どうしていったらいいのかというのは難しいなと思います。人間関係の希薄さとまでは言えないが、人間関係はあった方が、何かあったときに助け合えると思います。自分自身も含め、皆さんも、自分一人で生きているわけではないので、周りにSOSを出せる存在がいるということはあるがたいです。SOSが出せるような環境をソーシャルワーカーとしては作っていかなければと思います。

新藤 ありがとうございます。困ったことがあれば相談してくださいとか、お隣の人に気にかけていただくとか、少しずつの積み重ねが繋がっていくのかなと思いました。

染倉さん、ありがとうございます。引き続き、後半の全体討論で議論させていただきたいと思います。

それでは、続きまして、第二報告ということで、天宮さん、お願いいたします。

天宮 東日本少年矯正医療・教育センターからまいりました、福祉専門官の天宮 陽子と申します。こういった場での経験が少ないので、少しお聞き苦しい点もあるかと思いますが、よろしくお願いします。初めに自己紹介をさせていただきます。

私は、当時の児童福祉学科、介護福祉コースを卒業した社大生です。私も松窓寮に4年間住み、マンドリンアンサンブルと、当時、山の子会というボランティアサークルがあり所属していました。私は、介護福祉コースで、実習が多く、とても苦手で、エンジョイしていた染倉さんとは大分違い、どちらかというと圧におされて辛い学生生活をしてました。色々な経験をしていく内に、自分は福祉職として仕事を続けられるのかなと思っていました。社大の方はいい人が多く、その中にいる程、自分は善人ではないと思っていました。色々な実習をしていく内に、私の中に、支援する側の優位な立場というか、そこに本当は差別感等があるのではないかな…。その頃から私のモヤモヤがスタートしていました。そして、卒業後、就職せずにタイへ行きました。これは、突然ではなく、当時、バックパッカーが流行っており、社大の人もそういう方が多かったと思いますが、お金をあまり持たずに東南アジアの国へよく行っていました。そのバックパッカーで行ったタイで、ある障がいの方に出会い、私、日本で同じような方に出うと、本当にお恥ずかしい話ですが、近くに来ないでほしいと一瞬思ってしまったんです。それが、タイではそんな感情が湧かずに、むしろ自然と一緒にその場にいられました。その差って何だろう、これは私の差別感だけではなく、その場の雰囲気や環境で、障がい者と呼ばれる人が生まれてくるのかなと…。格好良く言うと、その答えを見つけたくてタイに行こうと決めました。大学のゼミの先生には、そのような事情は特に話してなかったので、何でタイ？タイが好きなの？と心配してくれ、今思えば大変ありがたい助言や対応をしていただきました。私は、今後、もしかしたら福祉に就かないかもしれない。この大学とはこれでさよならだとも思っていました。その後、タイに行ったのですが、結局タイで学べることは日本でも同様に学べると感じ、日本へ戻り、障がい者施設の非常勤で働き、介護福祉制度が始まっ

た年には、当時介護福祉士の資格を持っている人が少なく、割と引く手あまたで訪問介護事業所に勤めることができました。その後は、たまたま近所の養護老人ホームで、正職員になれるよといわれました。当時、訪問介護事業所は、非常勤職員が多く、正職員にはなりたと思っておりました。大学で取得した社会福祉士の資格を使って見てもいいかなという軽い気持ちで相談員の仕事に応募しました。そこでは、まだ措置制度の福祉サービスが残っている施設でしたのでカルチャーショックというか、地域の訪問介護で出会った人たちとは違う状況の利用者の方がおり、その中には、刑務所に何回も入っていた経験がある方もいました。その方たちと日々関わりながら、なぜこの人たちは刑務所に行っていたんだろうとか、刑務所に入って課題自体が改善されることがあったのかとか、素朴な疑問を持つようになりました。

そして、平成27年に神奈川医療少年院の福祉専門官の募集があり、応募して入職しました。私自身、試験の際、少年と関わったことが全然ないようだけど大丈夫ですかと聞かれたりしたのですが、「私大丈夫です。タイの少年院を見たことがあります。」などと言って、何とかかなるかと思いつつ仕事に就きましたが、就職してみると、今まで関わっていた高齢制度の仕組みとは違う印象を持ちました。児童、障がいの福祉制度の仕組みが分からないことがあり、非常に苦慮しました。その時に、今の制度をきちんと理解しないといけない、矯正施設は福祉専門職が少なく、私の行く福祉的支援や調整が福祉の全てと思われる環境にあり、何か変な責任感できちんと学ばないといけないと思いました。そんな時、社大と言えば安価で、新しい情報が得られ、真面目な感じがするので社大の講座を探しました。色々な講座等がある中で、精神保健福祉士の通信課程で改めて勉強しようと思いました。久々に社大の空気を感じ、通信課程のスクーリングでは社大の卒業生に会い、一人じゃないんだ、地域にこんな人達がい

たのだなと思い、何だが嬉しく安心感がありました。平成31年に神奈川医療少年院が、今の東日本少年矯正医療・教育センターに移転をし、私も異動になりました。この少年院は、関東医療少年院と神奈川医療少年院が合併したもののなので、社会福祉士の数も倍に増えました。少し気持ちに余裕ができた時に、自分はこの少年院でどんなソーシャルワークをして何をしているのか言葉で説明できるのかと思ったときに、またモヤモヤが出てきました。そんな時、たまたま矯正施設の研修所の講義に専門職大学院の先生が講師でいらしていて、久しぶりに講義を聴き、社大独特の懐かしさと、私のモヤモヤを解決してくれるかもしれない、そんな単純な気持ちで、通信課程修了の後に専門職大学院へ入学しました。専門職大学院では、実践研究がメインなので、実践のモヤモヤを口にできないまま入学してしまったことで、後で大分苦労しました。そして、ここからがようやく今の職場の話になります。私が現在働いている東日本少年矯正医療・教育センターは少年院になります。詳細はパンフレットを少し講堂入口に置いてあるので、よかったら見ていただきたいと思います。ホームページにも同じようなものがあります。私はこの少年院の中で、主に支援教育課程を担当しています。福祉専門官は、実際何をしているのかというと、少年院法44条に社会復帰支援が定められており、その中の福祉支援を主に担当しています。少年院はいろいろな専門職の方が一緒に働いており、法務教官や法務技官、医師、看護師、臨床心理士など、様々な専門職の方と連携しています。実際の支援方法は、皆さんが支援するときに変わらず、本人と面接をし、個人情報の同意書を取った上で、私たちが代わりに外部機関へ相談をするなどしています。その中で、関係者が来て面接をしたり、支援者だけで会議をしたり、少年が見学に行ったり、体験実習をしたり、面接をしたりなど、そういった繰り返しで支援が流れています。

実際に福祉専門官であるソーシャルワーカーは、どのような事をしているのかというと、そもそも考えてみると、少年院は、福祉施設や福祉の窓口ではないので、福祉制度の利用や福祉サービスそのものを必要としている人のための施設ではなく、少年には非行という理由があって、矯正教育を受けるために入っている施設です。これは、矯正施設だけではなく、会社や学校でもそうですが、福祉とは違う目的の場所でソーシャルワークが活用される場所が増えているように思います。そういう場所である少年院でのソーシャルワークに繋がる経路は次の3つがあります。1つ目は、家族や本人から相談を受けることです。教育期間の平均が11ヶ月なのですが、11ヶ月間社会から離れることで、社会的な手続が必要になることを改めて感じました。例えば、障害者手帳の期限が入院中に切れてしまうがどうしたらよいかという相談です。また、二十歳になる少年もいますので、自宅に国民年金の納付書が届いたのだがどうしたらよいか、少年院に入ると健康保険は加入しないので、その前後の手続はどのようにしたらよいか、そのような相談があります。入院中にお医者さんにかかって服薬を開始するというケースもあります。少年院を出た後でその場合は、どの病院に行こうか等ご家族とお話したり、本人と通院をどうしていこうかと話したりします。2つ目は、他の専門職、例えば保護観察所や、寮の法務教官といった別の専門職から依頼がある場合です。この場合は、既に課題がはっきりしていて、その解決に福祉制度の利用を希望する場合です。例えば、少年院を出院する場合、仮退院という形で出ていくことが多いのですが、仮退院するためには帰る場所がどうしても必要になります。しかしながら何らかの理由で、もともと住んでいた場所に帰れない場合に、少年が障害者福祉サービスの利用者であれば、こちらで施設等の帰る場所を探します。そして、3つ目が、アウトリーチになります。私が少年の記録や少年院での生活の様子を聞

いて、気になってこちらから会いに行き、声をかけるといこともさせていただいています。しかし、このアウトリーチが自分にとってはうまくいがなく、何でうまくいかないのか分からず、一番気になるけど解決ができない。今思えば、専門職大学院に入ったモヤモヤの研究のテーマだったのかもしれないと、このシンポジストの話を受けて初めて思いました。そして、その振り返りが、今回のフォーラムのテーマでもある、私にとっての「誰一人取り残さないソーシャルワーク」ともつながるのかなと思います。そのアウトリーチの部分の振り返ってみると、ソーシャルワーカーが福祉ニーズを感じているが、本人は感じていないケースが気になっていました。これは、私が制度に結びつketく、少年と面接をして、少年本人が困っていないのに課題を求めてしまい、結果、相手が拒否をして不安定になってしまうということがありました。このことで、私自身の態度を改める必要があると考え、ソーシャルワーカーが支援につなげるという、具体的にサービスや制度につなげなくてはいけないということにこだわってしまっているのではないかと。もちろん、住まいがない少年にグループホームを見つけたりすることは、非常に感謝されますが、本当に制度につなげることだけが、私たちができる支援なのかと考えました。思い返せば、支援をしてくれる人が会いにきて、自分のことを気に掛けてくれているんだとか、自分のことを忘れてなかったことが嬉しいという言葉もたくさん聞いていました。そうならば、面接の際には、ソーシャルワーカーが側にいて、気に掛けているんだと感じてもらうことに意味があって、少年と面接する中で、気にかけてくれるソーシャルワーカーが社会にもいるんだと伝えていくことも、つなげる支援なのではないかと思えるようになりました。

また、そもそもソーシャルワーカーが「困っていいんだよ」とちゃんと伝えられているのか、私自身の態度が、困っていることを言い出せない状

況をつくっているのではないかと感じました。ある時やり取りをしていて、どうしていいかわからなくて、「本当にあなたが困ってくれないと、私の仕事がなくなっちゃうんだよね。何か困ってるんじゃないの。」と言うと、「それは先生を助けてあげないと大変ですね。ちょっと困ってみましょう。」と、こんなちょっとしたことで、自分のことや自分の身近な人がこんな事で困っているなど話してくれることがあり、恥ずかしながら目から鱗の経験でした。

私が実践の中で、少年院だから特別にこうと言えるわけではなく、ソーシャルワーカーがいるどんな場所でも共通なことだと思いますが、ソーシャルワーカーが自分から出向いて、まだ出会っていない人たちに私達から声をかけ、何かちゃんと伝えることができれば、それこそが今回のテーマになっている「誰一人取り残さないソーシャルワーク」なんじゃないかなと思いました。ご清聴ありがとうございました。

新藤 天宮さん、ありがとうございます。スライドの写真は何でしょう。

天宮 これは神奈川医療少年院から移転のときにセンターに連れてきた犬の像です。ホープくんという名前があるらしいのですが、少年達の使っているグラウンドにあったので、写真を載せてみました。

新藤 ありがとうございます。社大にも像がありますので、ぜひ皆さんお帰りの際には見ていただきたいと思います。大変勉強になりました。アウトリーチとは、一体何なのか改めて考えさせていただきました。気にかけている人が側にいることを、伝えるだけでも意味があるということで、キーワードだなと思ったのが、「あなたが困ってくれないと私の仕事がなくなってしまう」という

のは、結構ソーシャルワークの本質に関わるような言葉だと思いました。私は、プログラム評価を専門としていますが、アメリカのボルチモア・LIFE プログラムという、出所する人達に、市民生活に移行するために少額の生活資金をお渡しする、それは政策的に意味があるか、ランダム化比較試験という社会実験をして調べた研究というのがございまして、結果、殺人など重度の犯罪には効かず、窃盗に関しては優位に再犯を抑えたという研究でした。ただ、私の記憶では、後々分かるのですが、生活資金を渡した介入ではなく、手渡しで「おまえ元気か」と声をかけて渡していたことが、再犯を抑えたのだと、何かの研修で聞いたことがございました。それを思い出しまして、ソーシャルワークは関係性を紡いでいくことが仕事だと改めて思いました。それでは、私から少し質問させていただきます。

資料の中に、支援の流れあり、一般的なケースワークとそれほど変わらないというお話があったと思います。インテークから始まり、アセスメント、プランニング等、支援があり、社会の中に居場所や仕事が必要になりますから、この支援の流れの見学や体験は、どういう所になるのか、教えていただいてもよろしいですか。何か職場の見学とか体験、支援機関の見学などになりますか。

天宮 そうですね。住まいのグループホームの見学や、就労先の就労継続支援B型などの見学を実施しています。「対象者がどう思うかが大切なので、絶対見学してほしい」と矯正施設にいるソーシャルワーカーや地域のソーシャルワーカーがうるさくこだわってくれ、以前は見学できなくてと断ることもあったようなのですが、今は、見学に行くことが多くなりました。遠方の場合、実は今月になって初めてだったのですが、ネットを活用してバーチャルで実施させていただきました。このような見学も矯正施設でやれるんだなと実感したといえますか、柔軟になってきているの

を感じます。もちろんそれだけではないのですが、でも一つとして私たちソーシャルワーカーの声がうるさかったので実現したのではないかと思います。

新藤 ありがとうございます。うるさかったというのは、少年院の方も福祉の支援が必要な方が多いんだと、そこにつながなければならないということだと思うんですが、想像なのですが、受け入れる側の就労支援施設は、少年院にいた方が来るよとなって、構えたり、心配したりするのか、しないのか。その辺りの見学や体験先の人達の受け取り方に、壁があるのか、ないのか。あるとすればどうやってクリアしているのかを教えていただけますでしょうか。

天宮 そうですね、少年がどんな少年なのかという気持ちと、意外に少年院の教官が怖いというのか、どんな感じで一緒に来るのか、当たり前なんですけど、想像ができないところなので、とにかく行かせてくださいみたいな感じです。実際は普通の格好をして行くので、ここで初めて安心というか、それを繰り返しているうちに、皆さんも比較的見学に来てくださいと言ってくれるようになったと思います。

新藤 ありがとうございます。会ってみると、そんなに怖い人達じゃないから、次の方も受入がスムーズになることで言うと、これは少年院に限らないと思いますが、当事者の方がご自身でいろいろな社会とのバリアを解消して行って、色々なところに当事者の方が会いに行くのが、社会にあるバリアを少しずつ少なくしていくことになっているのかな、そのように思いました。

それでは、後半ですね、全体討論のところでもまたご意見を伺いたいと思います。

天宮さん、ありがとうございます。

天宮 ありがとうございました。

新藤 それでは、第三報告、最後の報告になります。

杉山さん、ご準備できましたらお願いできますでしょうか。

杉山 「入管問題と日本社会～非正規滞在外国人の支援～」を報告させていただきます。

私は、入管収容問題を考えるソーシャルワーカーネットワーク、任意団体になりますが、事務局をやっている杉山と申します。よろしくお願いします。まず、私についてですが、大学では社会福祉士を取れなかったのが、大学を出てから、1年間、日中の昼間通う養成学校に通って社会福祉士を取りました。それ以来、ずっと福祉の現場で働いています。精神保健福祉士は2018年にこちらの社大で通信課程で学び取得しました。今は社会福祉協議会の権利擁護センターで専門員として働いています。今日お話しするのは、ボランティア、市民活動としての関わりについての報告で、入管収容問題を考えるソーシャルワーカーネットワークとしての活動についての報告となります。このネットワークですが、社会福祉士、精神保健福祉士を中心とした有志のメンバーで活動する任意団体です。取り上げる問題は、団体名にも入っていますが、入管収容問題です。聞いたこともある方もいらっしゃるかわかりませんが、様々な理由で在留資格がない、あるいは失ってしまった非正規滞在外国人が収容される施設があります。その施設の中で起きている、非人道的な扱い、正規滞在者として日本で生活できるようになるまでの過程で起きている人権問題、及びその背景にある問題のことを指しています。これはソーシャルワーク専門職のグローバル定義に基づけば、この問題は社会正義、人権、多様性の尊重に関わるもので、私たちとしては到底見過ごすことはできないと考えています。在留資格という言葉が出てきました

が、現在29種類あります。細かいですが、身分に基づく在留資格と、活動に基づく在留資格があります。身分に基づくというのは、永住とか定住、日本人の配偶者ということで、緑の部分になります。他は活動に基づくもので、活動内容や在留期間など、制限を受ける活動の在留資格になります。この在留資格は、様々な理由で失ってしまい、だけど自分の国に帰れない事情がある人達というのが多く存在します。日本では、在留資格がない外国籍の方を指して、不法滞在者、不法残留者という表現がよく使われます。海外では、1975年の国連総会決議に基づき、イレギュラー、非正規、アンドキュメント、無登録、未登録、書類のないといった表現が一般的であり、こちらが国際標準ですが、日本は、まだまだ不法滞在という言葉が使われている現状です。人権上、この不法滞在という表現が問題であるという点から、私達は、社会正義、人権、尊厳を認めるソーシャルワーカーですので、表現には気をつけなければならないと思っています。多文化共生、多文化ソーシャルワークという言葉をよく耳にするようになりましたが、在留資格がもともとない人や、何らかの理由で在留資格を失ってしまった非正規滞在外国人の方も含めて、誰一人取り残さないソーシャルワークの実践を私達はしてきたのかというところで、是非、今日は報告したいと思ひまして、テーマに上げています。参考というところに挙げていますが、「滞日外国人支援基礎力習得のためのガイドブック」には、滞日外国人という用語が使われており、在留資格の有無や種類を問わずと書いてありますが、実際の社会保障・福祉制度の利用は、在留資格の有無と種類によって決められているのが現状です。日本にどれ位の数の外国籍の方がいるかというと、令和4年末の時点で過去最高の人数と言われ、約307万人となっています。この307万人というのは、長期、中長期在留者、特別永住者の数です。今日テーマにする非正規滞在外国人はどれ位いるかというと、7万491人。令

和5年1月1日現在の数です。これが、多いか少ないかというのは皆さんどう感じるかという所ですが、直近の5年で見ると減っており、少ないのではないかなと思っています。その中で、収容されている人もいますし、仮放免者、後で説明しますが、何の権利もない状態で地域にいる方達もいます。その方達を送還忌避者と法務省入管は呼んでいます。その方達は、4,233人という数になります。もう一度いいますと、様々な理由で在留資格を失って、自分の国に帰れない事情がある方が多く存在することを、改めてお伝えしたいと思います。その中で、今年の6月9日に、改正入管法が国会で成立しました。この法案というのは、先ほど申し上げました、送還忌避者、帰りに帰れない人たちに関わる内容です。当事者、支援者、弁護士、多くの市民からは、これは改正ではなくて改悪案だとかかなりの反対の声が上がった内容になります。例えば、日本は著しく難民認定率が低いのですが、それを改善しないまま難民申請3回目以降の人を無理やり送還できるようにする。また、帰国に応じないと処罰する、刑罰に科すといった内容や、監理措置制度といって、収容から解放された人を民間人に監視させるといった内容が盛り込まれた改悪案です。英語のニュース、アメリカのABCニュースでも報じられました。帰国できない事情のある非正規滞在外国人、こういった人達なのかを見ていきたいと思っています。

まず1つ目に、人生の大半を日本で過ごす移住労働者です。主にバブル期の頃に来日して、労働力不足を補った人達で、今も日本に住んでいる人達です。次に、日本人または在留資格のある外国人と結婚している人、そして、難民認定申請をしているけどまだ認められていない人、未成年の仮放免者が挙げられます。このような事情があっても、非正規滞在ということで、退去強制命令を出されて強制送還される可能性があります。もしくは、強制収容をされる、仮放免での生活になります。仮放免というのは、就労が禁止され、国民健

康保険にも加入できず、移動制限があり、とても厳しい状況です。ただ、退去強制命令が出ていても、法務大臣の裁量で在留が許可される在留特別許可がありますので、多くの方はこの在留特別許可を認めています。具体的に見ていきますと、難民として認められない、でも帰れない、難民申請者たちということで、グラフを見れば分かるのですが、日本の難民認定率は諸外国と比べてもとても低いです。この写真は、ミャンマー、「ロヒンギャ」民族のミョーさんです。ミャンマーで迫害を受け、2006年に来日後すぐに難民申請しましたが、なかなか難民認定をされず、今年の2月には3回目の申請が却下されてしまいました。現在審査請求中ですが、彼も、今回、国会で通過した入管法改正案によれば、強制送還の対象になってしまいます。このスライドは、日本人と結婚している日本に家族がいる人達です。婚姻届けを出して正式に結婚しているのに入管だけが認めない。その為、日本人配偶者との在留資格が得られないまま、何年も苦しむ人がいます。余談ですが、昨日NHKですかね、『やさしいねこ』というドラマが始まりましたが、ぜひ調べて、知らない方は見てもらいたいと思います。中島京子さん原作の小説で、入管行政に挑む家族の話です。まさに今、現実にかけていることがドラマで表現されている状況です。帰れない日本生まれ、日本育ちの未成年者も約300人います。大学までは、何とか行くことができたとしても、仮放免では働けないので、看護師になりたいとか、弁護士になりたいという夢を持っても働けないので夢を叶えることができません。国民健康保険にも入れませんし、生きるための当然の権利が子供の頃から認められていない、これはとても許しき事態と言えます。法務省による送還忌避者の方達は、今事例をみてきましたが、一括りにして無理やり送還させている人達でしょうか。実は、退去強制令書を出された人のほとんどの9割以上の方が自費出国しています。チケットを自分で買っています。9割に入

れない、残りほんの僅かな人たちが、実は拒んでいる人ではなくて、帰れないから残っているということです。繰り返しますが、社会正義とか、人権、尊厳の保持、多様性尊重といった視点を軸とする私達としては、この現状は黙っていられますし、そこで、私がどう関わってきたのかを具体的にお話していきたいと思います。

まずは、ミクロの実践で、ケースワークになりますが、品川にある東京入管や茨城県牛久市にある東日本入国管理センターでの面会活動です。国籍と名前が分かれば、誰でも面会申請ができます。面会はアクリル板越しの狭い部屋で、一人最大30分の面会です。収容されるといつ出られるかわからない、無期限の長期収容というだけで、皆さん心身状況が徐々に悪化しているわけです。それ以外に様々な問題があります。衛生面、栄養の偏った食事、自由時間が1日たった6時間、高額な公衆電話、制圧と呼ばれる暴行や虐待、長期収容による拘禁症状や施設症化。中には自殺未遂、実際に自殺で亡くなった方もいて、いろいろ問題をあげればきりがありません。実際に収容施設の中で亡くなった方たちのリストになりますが、2021年まで挙げていますが、去年2022年にも東京入管でイタリア国籍の方が自殺をしています。これはまだ真相解明されていません。この問題を多くの人が知るようになったのは、恐らく2021年3月6日に名古屋入管でスリランカ国籍のウィシュマさんという方が亡くなったことと思っています。それ以来、入管の実態が多くの人に知られるようになりました。そして、収容を解かれると、仮放免という形で、外に出て生活をするのですが、これは一定の条件というのがあります。就労は禁止、社会保障からは排除され、自分が住む都道府県以外への移動は禁止されているので、入管に許可をもらう必要があります。これは、生存権に関わる問題だと思っていて、この調査をNPO法人北関東医療相談会が行っています。ネットで調べると出てくるので、ぜひ時間があるとき

に見てください。具体的なケースとして1人の方をご説明したいと思います。この方は、Aさん、40代前半の男性でアジア出身の仮放免の方です。約10年前に来日して難民認定申請中で、最初は特定活動の6か月の在留資格があったのですが更新ができなくなって、非正規滞在、今は仮放免です。糖尿病、喘息、アルコール依存症があります。帰国したくてもできない。その中で基礎疾患と依存症がある。仮放免という不安定な立場が、さらに依存症を悪化させてしまう状況です。仮放免の方達の社会支援、何が使えるかをいろいろ試行錯誤していますが、ほとんどない状態なんです。非営利、個人的な社会資源に限られてしまい、本当に仮放免されるのは過酷な状況です。難民支援や外国人の方を支援するNPO団体とつながっていれば、無料定額支援事業の医療機関や、地域のフードバンクなどで何とか生き延びることができますが、多くの方は誰ともつながることができず、路上生活になる人、誰も知らない中で亡くなる方もいると聞いています。大変過酷な状態の仮放免の方ですが、大変だと私達が言ってもばかりもいられなく、何とかその生活の中でも生きる希望を見いだせたらと思って、一人一人、何が好きで、どういう所に強みがあるのかストレングスに着目した関わりも行なっています。この方は、先ほどご紹介したAさんです。アルコールの課題があるなかで、料理が上手なことが分かってきました。ちょうどコロナ禍だったのでオンラインで少人数の料理教室を開催しました。色々なスパイスを使ってチキンカレーを作りました。これはオンラインではなくて、今度対面でやろうとして対面で開催した料理教室のチラシです。収容所の収容と仮放免というのは、切っても切れない関係で、外に出たからよかったね、では済まされません。仮放免ではとても生きていくのが大変なので、連続した関わりが必要です。ある仮放免者の方はこう言いました。仮放免で外に出て自由になったわけではない。仮放免では何もできない。生きているけど死

んでいるみたいだ。役所に相談に行っても、住民票がないからだめといわれて、この地域に実際に存在して生きているのに、自分は幽霊みたいだと言っていたことをよく思い出します。これは参考までとなりますが、日本の入管の収容は、恣意的拘禁という国際法で禁止された身体拘束として言われています。日本の身体拘束の恣意的拘禁は主に3つあげられていて、刑事拘禁、入管収容、精神科医療の強制入院とされています。昨年、国連の自由権規約委員会からもここに挙げられている1～6について改善を図るよう勧告を受けています。本来なら、勧告を受けているので改善していないといけませんが、改善するどころか、さらに彼らの人権、命を軽く扱うような入管法の改正案を可決させたのが現在の日本の状況です。次に、実践活動として、地域での活動は、仮放免の方は住民登録がされないの、地域からも排除されてしまう可能性が高いです。これは当事者だけでなく、支援者も最初から諦めてどこにも相談に行かなくなりがちなのですが、実際に地域に仮放免者が住んでいる、生きているという実態を調べて理解してもらうことから、この状況を変えることになると思います、当事者と話し合っ、一緒に相談に行くようにしました。図書館は当然誰でも使えると皆さん思うかもしれませんが、身分証明書を出さないといけないので、結構だめですといわれることがあります。武蔵野市はなんとか利用できたという実態です。相談に行ってみた成功例の一つを紹介したいと思います。ある市区町村の社協のボランティアセンターへ仮放免者と一緒に相談に行きました。仕事が禁止されて毎日何もすることがないのでひきこもりになりがちです。本人の希望も伺ってボランティアがしたいとのことで、社協のボランティアセンターに行きました。相談に乗ってくれた担当の方は、仮放免の方の相談を受けるのは初めてですと言いつつも、色々インタビューしてくれ、親身に話を聞いてくださり、ボランティアどころか住まいや食べ物、困っ

ている事は沢山あるんじゃないですかと言ってくれました。この後、ボランティアセンターを中心に、社協全体で住まい探しなどしてくれ、空いている一室を使わせてくれるオーナーさんを探してくださいました。家電や家具も全部かき集めてくれ、さらには入管や仮放免について勉強会を開きたいとまで言うてくれました。実際に3、4回、社協の職員の方や地域の方向けに、一緒に勉強会を行いました。

マクロの活動をご紹介したいと思います。国や社会へに向けた活動です。この間、入管法の改正があったので色々なアクションがあり、その一部です。5月8日に練馬でシンポジウムを行った時の写真です。こちらは、衆議院第二議員会館前で「入管法改悪反対アクション」ということで、1月の終わりから毎週金曜日18時から19時を固定にして、国会前ショットインをやりました。ちょうどマイクを持って私がしゃべっている写真を載せています。当事者だけでなく、支援者、市民、国会議員、メディアが集まって、絶対、この改悪法案を通さないんだ、許さないという声を、一人一人がスピーチをしました。こちらは練馬駅前です。入管収容問題を考えるソーシャルワーカーネットワークのメンバーが地元の練馬でもスタンディングをすると提案し、5月24日から毎日、練馬駅付近でスタンディングをしました。毎回、ソーシャルワークのグローバル定義や、原理原則をもとに入管法改悪反対アクションとなりました。講演会も色々これまで開催してきています。映画の自主上映会をしたりしました。これは5月28日に行った講演会で、ちょうど参議院の法務委員会で入管法改正案が審議されている真っ最中で、タイミングよく講演会を実施することができました。お話していただいたのが元難民審査参与員の阿部教授、そして、最初のほうに記事を紹介したミャンマーのミョーさんにお話をさせていただきました。後は、声明文を出したりしています。一昨年は、独自で声明文を出しましたが、今年に関しては他の団体

の賛同団体として加わりました。

まとめに入りますが、今日、この場で非正規滞在外国人についてお話しさせていただきましたが、誰一人取り残さない、現行制度の中で、基本的人権や生存権が十分に保障されていない人たちへの視点というのは、引き続き、私たちソーシャルワーカー実践の課題と言えます。中でも今日お話しさせていただいた、帰るに帰れない事情を抱える方たちへの支援については、まだまだソーシャルワーカーの中でも知られていない状況であり、取り組む人も少ないと感じています。私たちがやるべきことがソーシャルアクションです。現行制度の中で基本的人権、生存権が保障されていない現状を変革するには、このソーシャルアクションが極めて重要だと考えます。ソーシャルアクションは、ミクロから始まって、メゾ・マクロと連続した実践であり、またそれがミクロに帰る一連のアプローチです。対象が誰であっても、私達は、目の前にいる、当事者が抱える困難を構造的に捉えることも大事ですし、アプローチしていく必要があります。改めてですが、私たちソーシャルワーカーが持つ軸というのは、グローバル定義です。これに基づけば、今回お話しした非正規滞在外国人の支援も必然的に取り組む課題かと考えます。最後に、忘れてはいけない視点ということで、国境を越える意味を皆さんに想像してもらいたと思います。ちょっと聞き慣れない言葉かもしれませんが、移住トランジション複雑化リスク状態というのが、「看護診断 定義と分類」のところに掲載されています。国境を越える、自分の国を出てほかの国で暮らす、生きていく、ということがどれだけ心身に負担がかかっているかを、私たちは絶えず想像しなければなりません。難民や移民の方たちは、心身に問題をきたしても、特に非正規滞在者の方は、本当にサービスというものを十分に受けられない状況で、誰にも相談せず、ひっそりと生きています。特に、心理面においても大事だと思っていて、トラウマインフォームドケア、

特に難民の方には重要な視点だと考えます。

終わりに、誰一人取り残さないソーシャルワークというのは、国や行政の政策を、しっかりと弱者の立場から捉えて、社会をよりよく変革していくという実践的学問であり、目的は社会変革です。国籍、在留資格の有無で区別することなく、彼らの社会経済的正義の促進を追求する。人権と生活の質を制限する状況を阻止するというのが私たちの原則です。帰るに帰れない事情のある非正規滞在外国人の不安定な状況をまずは知ってもらい、ともに考え、実践する仲間が増えたらうれしいです。発表は以上になります。

ご清聴ありがとうございました。

新藤 杉山さん、ありがとうございます。大変な問題が起きているんだなということを私も改めて認識いたしました。お話をお伺いして、SDGsですとか私たちの言葉や分野で言えば、地域共生社会、あるいは、重層的支援体制整備事業もございますが、どこか総論は賛成と、各論は反対。そういうことになっているのではないかと、私自身のソーシャルワーカーとしての価値も問い直すような、そんな投げかけをいただいたなと思っております。2つだけ質問があるのですけれども、1つは、仲間になっていただきたいですというお話があったのですが、今日聞いているフロアの方も、あるいは学生も、関心を持った方がいらっしゃると思うんですが、入管収容問題を考えるソーシャルワーカーネットワークというのは、どうしたら入れるのかを教えていただいてもよろしいでしょうか。

杉山 そうですね。最初のページにメールアドレスを載せたので、そこに入りたいですと送っていただければ私がお返事します。もしくは、このシンポジウムが終わった後、しばらくいるので、直接お話してもらえばいいかなと思います。実際に、どんなことをやっているかという、毎月1回定例会という形で、今、入管法の改悪がされて

しまった中で、これからどうするのかを話し合いや、講演会をやろうとか、収容所の中はどんな状態になっているのか等、情報共有のミーティングをしているので、ここでぜひ情報をキャッチしてもらえたらと思います。後は、収容所の面会に行ってみたいと言ってもらえれば、私が一緒に行きますし、あと仮放免の当事者の話を聞く会というのも定例会の中で実施していきまして、当事者とつながることもできるので、ぜひ関心がある方は教えてもらえたらなと思います。

新藤 ありがとうございます。それは特に有資格者限定とかではないですか。

杉山 もちろん、大事にするのはソーシャルワーカーの理念だったりしますが、資格を持ってなくても実際にソーシャルワークをやっている市民もたくさんいますので、そういった人たちとの連携も大事にしています。特に資格や条件はなく、日本語教師の方や、通訳の方などもいますし、学生の方も協力しています。

新藤 ありがとうございます。関心のある方はぜひご連絡いただきたいと思います。後、1点になりますが、ソーシャルアクションが非常に重要だと、私も本当にそうだなと感じました。当事者の方も、生きているけど死んでいるみたいだという言葉も大変分かります。私も、学生さんに私達は戦うソーシャルワーカーだと、そういう社会を変えていく役割を担っているんだと話をします。マクロレベルの実践はなかなかミクロの実践と違って、社会がいい方向に進んでいるとか、いわゆるアウトカムというか成果を実感しづらい、そういう実践なのではないか、なかなか手応えが得られないんじゃないかと想像するのですが、このマクロレベルの実践、改悪法、改悪案というのはありましたけれども、マクロレベルの実践の取り組みの効果を現在どの程度実感できているのか、肌感

で結構ですので教えていただければと思います。

杉山 実際に、国会では改悪の法案が通った部分はすごく残念ですが、反対運動をしている中で、一昨年もこの入管法の改正案が出されたとき、その時は廃案にできたのですが、2年後の今年、ほとんど同じ骨格で、批判があるにもかかわらず政府が法案を出してきた時、一昨年よりも本当に沢山の方々が声を上げてくださって、全国各地でスタンディングがされたり、市民の方たちがこれはおかしいと気づいてきたなというのは、実際、感じています。ただ、結果としては、その改悪案が通ってしまったのは、政府も本気でこれをぶち込んできたことを実感しました。ただ、これで終わりではなく、国会が終わっても色々なところで皆さんが活動していますし、ミャンマーの方ですとか、イランからきた人たち、本当に保護すべき人を保護すると法務大臣は言ってましたが、全然保護されていない状況なので、当事者がいる限りは、常にずっとやり続けなければいけないというところでは、仲間が増えたというのはすごく実感しています。

新藤 ありがとうございます。まさにこれから力を合わせて戦っていかないといけない課題だと思いますので、ご関心を持った方は戦う側に回っていただいて協働していただければと思います。それでは、杉山さん、ありがとうございました。

そうしましたら、限られた時間ではございますが、全体討論をさせていただきたいと思います。本日の大会テーマに引き寄せて、こんなことを考えてみました。

例えば、支援の必要性に気がつかない人たちの存在ということで、ソーシャルワーカーは気になるけれど、なかなか本人が、こういう人たちこそアウトリーチが必要かもしれない、そんなお話がございました。また、支援を拒んでしまう方々の存在ということで、例えば介護支援の利用を拒否

される方であったりとか、それから少年院のソーシャルワークは自分で支援を求めてきているわけではないということと言うと、自分で支援を望まない、スタートとしてはそういう状態じゃない方がいらっしやったり、あるいは、先ほどの入管の問題、恥ずかしながら私も2021年のスリランカの方が亡くなった事件をきっかけにこういう問題があるのだと当時思ったのですが、その記憶も薄れ、今日、改めてそうだったと思い出したぐらい、そういう状況でございました。それで言うと、社会全体に知られていないのではないかと思います。その間に、やはり生活に必要な支援が十分に得られていない方がたくさん存在している、今日のテーマの言葉で言えば、「誰一人取り残さない」どころか、「取り残されている人」がたくさんいると、そういう話なんじゃないかと思うわけでございます。ミクロからマクロの問題というのは繋がっていると、そんな風に思ったわけでございます。そんな中で、2つほど、お時間があればと思うのですが、議論のテーマを立てさせていただきました。1つ目は、インボランタリー・クライアントといいますか、自ら支援を望まない人たち、あるいは周縁化された人たち、当たり前の権利が得られない人たちの存在、こういう人たちに対してソーシャルワークというのは一体何ができるのか、何をすべきなのか。これについては、シンポジスト3名のプレゼンの中で、それぞれお考えをある程度聞けたのではないかと考えております。それを踏まえ、こうした人たちをゼロにする、まさに誰一人取り残さないというのはスローガンとしてはきれいですが、本当に可能なのだろうかということについて、非常に難しい問いなのですが、お考えをおきかせいただければと思います。

2つ目に、自立とは何なのか。言葉の通り、本当に一人で立つ事なのだろうか。ソーシャルワークの目標として、よく自立が掲げられるわけですが、ソーシャルワークが目指す色々な方の自立とは何なのか、改めてお考えをお伺いできればと

思っています。

大変難しい問いなのですが、まず1つ目の何をすべきなのか、ゼロにできるのかということについて、お考えを伺いたいと思います。発表順に、染倉さん、どうでしょうか。

染倉 中々難しいところではありますが、ソーシャルワーク、ソーシャルワーカーの一つの役割として権利擁護（アドボカシー）というのがあります。どなたの言葉だったか、アドボカシーは、あれ？おかしい、というのがあるんじゃないかと。ソーシャルワーカー自身が、何か違和感がある存在であり続ける必要があると思っています。どうしても、行政職員として、制度に乗せてしまう面は正直多く、相談を受けたときに制度利用を優先するので、こちらが良いのではないですか？と安直に話してしまうことがあるのですが、そうではなくて、本当に何が困っているのか、本人の困りごとを気づけるような力が、ソーシャルワーカーには求められていると思います。

新藤 ありがとうございます。そうした違和感に気づいて、一つずつ前に進めていく、それがソーシャルワーク実践なのかなと思いました。続いて、天宮さん、いかがでしょうか。

天宮 そうですね、もともと私のいる矯正施設は、社会福祉士という専門職がまったくいない状況でしたが、そういった所に入るようになり、先ほど失礼な言い方をしましたが、福祉の人がうるさいから矯正施設側にも声が届く、そういう力がソーシャルワーカーにはあるのかなと思います。声にして、実現していく力が私たちにはあるんだということを、自信を持ってやっていけたらいいと思います。

新藤 天宮さん、ありがとうございます。声を上げて、1人ではできないことも、仲間を作って、

実際に矯正施設の支援、実態も変わってきているという実感の伴いながら、進めていくというのは非常に重要なことだなと思いました。杉山さん、いかがでしょうか。

杉山 誰一人取り残さないことが可能かという点は、誰一人取り残さないという言葉が何かと考えてみましたが、支援に乗せる、乗せないではなく、皆さんのお話の中でも出てきた一人にさせないとか、孤立させない、忘れていないよ、気にかけているよという意味であれば、私はできるかなと思いました。常に会うわけではないけど、何かあった時に思い出すというか、あの人大丈夫かなとか、そういう意味であれば、忘れていないよというメッセージを送ることはできるし、誰一人取り残さない状況なのかなと、皆さんの話を聞いて思いました。

新藤 ありがとうございます。大会テーマである「[生]に寄り添う社会福祉とは何か」、「誰一人取り残さないソーシャルワークとは何か」という答えに近づくようなコメントをいただけたのではないかと思います。私たちがそばにいるよ、あるいは私たちではなくてそばにいる人がいるよ、ということであれば、まさに誰一人取り残さないというSDGsのスローガンを、私たちの力で達成することができるのではないかと、非常に勇気をいただく言葉だったと思います。

2つ目に、自立という話がよくあるわけですが、今の杉山さんの言葉を借りれば、本当に1人で立つということを目指していくものなのかと、率直に疑問に感じるわけです。この自立についてこう捉えていますとか、こういうことを大切にしていますというご意見があれば、これについてお伺いしたいので、発表順に聞いていきたいと思います。染倉さん、これも難しい質問なんですけど、いかがでしょうか。

染倉 そうですね。自立という言葉は、確かに福祉の現場でよく使ってしまうなとは思っています。このお題をもらったときに、生活保護の制度の中で自立というと、生活保護から脱却して、生活保護を受けなくても生活ができていくということの一つの自立、生活保護の制度の中ではそうなりますが、それをソーシャルワークという観点で自立なのかといったらまた違うかなと思っています。生活保護を抜けたから、はいさようなら、そんな簡単に一人で生きていくのはできないと思います。そうなった時に、自立というのは、天宮さんもお話をしていた通り、金八先生ではありませんが、人は誰かに支えられていて生きていて、たった1人では生きていけないと思うんです。なので、誰かしら、困ったときにSOSを出せる人がいることや、どこで耳にしたのか記憶がわからないのですが、自立していくっていうのは依存できる場所を増やしていく、色々な所でつながりを持ちながら、自分らしい生活を送っていける状態が自立なのかなと思います。

新藤 ありがとうございます。何か私も誰かのこういう人でありたいなと思いました。

天宮さん、いかがでしょうか。

天宮 この言葉、本当に考えさせられることがすごくあり、自立という言葉、呪いの言葉といわれたことがあります。一般的に経済的な自立をイメージできる人にとっては、あまり自立についてそんなに悩むことがないと思いますが、自立という言葉にずっと呪いというか、呪縛というのか…できない自分があるのに、経済的に自立しろとか、少年の中には、その言葉で苦しんできている人も結構います。私もつい、ソーシャルワーカーの魔法の言葉じゃないですが、使いやすい言葉として自立と言ってしまう。

では、それをどう言えばよいのかと考えると、自分にとっては、生きるために衣食住をまずは借

ることが自立なんです等、皆、それぞれの言葉できちんと自分なりの自立について話せるので、まずそれを聞かないと、そこを一緒に考えていくことが大切だと思います。また、障がい者福祉サービス利用の支援計画を持ってきて説明していただく機会があるのですが、少年達はある目標をしっかりと見ないのですが、それよりも、その目標に対して、自分がすべきことという欄と支援者もこういうことしますよってという欄がありますよね。その欄を見て、俺もこれをやらないといけなけれど、支援者も同じ目標に向かって、こういう風にしていくなんだという所に少年が関心を示すんです。対象者それぞれが発する言葉の意味をキャッチして言葉にしていけないと、自立という簡単な言葉に置き換えて使ってはいけないんじゃないかなと思います。

新藤 ありがとうございます。呪いの言葉ということで私も気をつけて使っていきたいなと思います。杉山さん、いかがでしょうか。

杉山 私がこのテーマに上げた非正規滞在外国人の方たちの仮放免の方において、自立というと、そもそも頼れるものがなくて、何か、自立というより、生き残るための、毎日がサバイバルみたいなもので、自立って考えると、その文脈でとても難しいなと聞いていました。でも、皆さんからよく聞くのは、どうしたらいいのか分からない、これから自分たちはどうなるの、自分たちが普通に働いていきたいだけなんだということをよく聞きます。そういう意味では、全員同じではありませんが、一人一人、自立の在り方はあるのかなと思います、何とか自分でやり取りできるから大丈夫だよという人もいれば、教えて欲しいとか頼りたいという人がいるので、自立は一人一人違うのかなという気がします。私たちが考える自立を押しつけるのではなく、その人、一人一人に合わせた自立は何かと考えるのが大事なかなと思います。

新藤 ありがとうございます。一人一人の自立を考える、私も、色々それができていたかなと自分の実践を振り返る機会になりました。

それでは、いただいている時間もそろそろですので、私からまとめをさせていただき、その後に、大学生の方もたくさん参加しておりますので、一言ずつエールを送っていただいて終わりにしたいと思います。

今日のテーマが、「誰一人取り残さないソーシャルワーク」ということですが、それが本当に可能なのだろうかと私自身も思っていました。そばにいて、誰かとつながるということを目指すんだと、それであつたら、私たちにそれができるのではないかというのは、勇気づけられた結論だったのではないかと思います。また、そのために何をしなければいけないのかということは、今日の3人の発表の中にあつたと思いますので、ご参加いただいた皆さまには、自分だったら何ができるかを考えていただけたらと思います。

いずれにしても、私達は一つの仲間として、ソーシャルワーカーという一つの価値を共有しながら、社会を変えていくということに立ち向かっていかなければいけないんだと、改めて感じた時間となりました。また、このテーマを、引き続き、皆様ともご議論させていただきたいと思います。それでは、一言ずつエールを、お願いいたします。

染倉 まず、日曜日にもかかわらず、会場にきていただいたり、Zoomで参加いただいたり、ありがとうございます。参加するということは、興味があり、意欲があることだと思いますので、関心を持つということをお願いして欲しいなと思います。入管の問題など、なかなか自分から興味を持って調べないと分からない、知らない話題だと思いますので、社会問題に対して興味、関心を持続してもらえたらいいのかなと思います。大学生って何も知らなくて当然だと思っているので、大学生でこういうことに興味があるので教えてくれま

せんかと杉山さんに連絡したりすると、では見学しますかとなっていきますので、社会人になるとどうしても所属があって、なかなか動きにくい所があるので、今のうちに、大学生という立場をうまく利用して、色々なことに興味、関心を持って、世界を知ってもらえるといいのかなと思います。

新藤 染倉さん、ありがとうございました。天宮さん、お願いします。

天宮 今日いらしているのは何らかの形で勉強されている方たちなのかなと思いますが、今つらくても、きっとそれが何かいいことになるのかなと、私は、いつも勉強しているときはつらいので、きっとそれが何かにつながるのかなというエールと、また今日、こうやってお二人のシンポジストさんとお会いできて、頑張っている他の社会福祉士が自分のパワーにもなるので、また皆さんとどこかでお会いできるのを楽しみにしています。

今日はありがとうございました。

新藤 それでは、杉山さん、お願いします。

杉山 本当に日曜日に聞きにきていただいて、オンラインで参加いただいて、本当にありがとうございます。今日のテーマに出ていた生活保護のことは、確かに最後のセーフティネットではあるんですが、まだまだ必要な人が受けられていない状況があり、犯罪をした人の社会復帰に関しても、まだまだ地域が受け入れる土台がないです。入管の問題に関しては、そもそも知っている人が、まだまだ少ないということがあります。そういう問題がたくさんあって、ソーシャルワーカーとしては、全部取り組んでいくべき課題ということで、ぜひ覚えておいていただきたいということ、ぜひ働くときには、高齢者福祉とか児童とか、障がい

者とか、どうしても制度の枠内で働くことになりがちですが、そうではなく、色々な問題があって、まだ取り組まれていない所にも私たちはアプローチしていかなければならないということを、ぜひ頭に入れて、これからも一緒に頑張っていけたらいいなと思っています。今日はありがとうございました。

新藤 それでは、私の進行が悪くて時間を超過してしましまして申し訳ありませんでした。

改めて三人のシンポジストの方々に大きな拍手をお願いいたします。それでは、進行を戻します。菱沼先生、お願いします。

菱沼 ありがとうございました。皆さん、どういう感想をもちましたでしょうか。

私の専門は、地域福祉、コミュニティソーシャルワークになりますが、まさに制度の枠にとらわれずに一人一人向き合うということをやっているわけですが、そういう中で今の社会で誰が取り残されてしまっているのだろうか、そこにしっかり目を向けることが大事ですし、また向き合っていくソーシャルワーカーの必要性、さらには今のお話の中でひとりぼっちにさせない、コミュニティをどう作っていくのかという所を考えていきながら、また制度政策を働きかけていくのか、色々、様々なことが必要であるということを考えさせられました。

登壇者の染倉さん・天宮さん・杉山さん、そしてコーディネーターの新藤先生に大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。


以上をもちましてシンポジウムを終了します。昨日から、多くの方にご参加いただきまして、ありがとうございました。

以上をもちましてフォーラムを終了いたします。ありがとうございました。

<p>日本社会事業大学社会福祉学部 シンポジウム</p> <h2>『生』に寄り添う社会福祉 ～誰一人取り残さない ソーシャルワーク～</h2> <p>日付：令和5年（2023年）6月25日 場所：日本社会事業大学</p> <p>染倉 有希 （つくば市 福祉部 社会福祉課 保護第二係/ 社会福祉学部 福祉計画学科 第57期2017年卒業/ 社会福祉士・介護支援専門員）</p>	<h2>おことわり</h2> <ul style="list-style-type: none"> 今回の講演内容・資料掲載内容は私自身の見解であり、必ずしも所属する組織の立場、意見を代表するものではありません。 日本社会事業大学「一卒業生」として、現在の業務内容や取り組みについてお話するため、所属組織・団体の考えとは、必ずしも一致しないことを予め御了承ください。 また、講演内容・資料について、所属組織等への問合せ等は控えて頂きますようお願いいたします。
--	--


<h2>プロフィール</h2> <ul style="list-style-type: none"> 平成29年(2017年) 日本社会事業大学 社会福祉学部 福祉計画学科 卒業 平成29年(2017年) 茨城県 つくば市 入職 地域包括支援課 配属 (高齢者虐待防止・成年後見制度・地域包括支援センター運営) 令和3年(2021年) 社会福祉課に異動 生活保護ケースワーカーに任命 (生活保護法に基づきケースワークを実施) 	<h2>大学生生活</h2> <ul style="list-style-type: none"> 学生寮(松窓寮)で生活 <ul style="list-style-type: none"> 先輩との2人部屋生活・エアコンがない環境。 自治寮のため、寮生から直接水光熱費や寮食費を回収する！ 滞納する寮生への対応を通して、さまざまな事情があるなかで、最大限配慮しつつ、未収金の回収を行った。
---	---

<h2>大学生生活</h2> <ul style="list-style-type: none"> サークル活動 <ul style="list-style-type: none"> ボランティアサークル：学生児童劇団ビッポ、Hi-Ho!、ブレイクアサークルおもちゃばこ、言の葉、さんさんさん、CoCoo 運動系：バドミントンサークル、硬式テニス部 その他：社大福祉ネットワーク、障害学生支援組織CSSO、学生自治会、オープンキャンパス委員会、たんぼぼ(清瀬3大学交流等) 最大12団体に所属 →この状況になったのは、「面白そうだから、とりあえず参加する！」という考えから 最終的には、8サークルに所属 	<h2>大学生生活</h2> <ul style="list-style-type: none"> CoCoo <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災の被災地の一つである気仙沼市を中心に児童館でのレクリエーションを企画 →「ボランティアにも支援が必要なのではないか」と思い、学内調査を行い、学内学会で調査結果を発表(詳細は[社会事業研究56 P.92-P.98]) オープンキャンパス委員会 <ul style="list-style-type: none"> オープンキャンパスに来た受験生や保護者に対して、大学職員ではないからこそ伝えられる生の社大の雰囲気や魅力を伝え、社大の魅力を伝える活動。 →自分の思いを言語化し、それを理解してもらえるように伝えることの難しさと面白さを経験できた。 たんぼぼ <ul style="list-style-type: none"> 清瀬市内にある「明治薬科大学」「国立看護大学校」で多職種連携についてともに考えるサークルを立ち上げる。 →一から団体を作り、運営し、他の団体と連携・協働することの面白さ・難しさ、考えを共にする仲間の大切さを経験。(詳細は[社会事業研究54号-57号])
--	--

<h2>就職活動について</h2> <ul style="list-style-type: none"> • 当初の就職希望先 <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会福祉協議会 • 医療ソーシャルワーカー • 大学職員 • 就職希望先に「行政」という文字はなかった。 	<h2>なぜ、行政に・・・</h2> <ul style="list-style-type: none"> • 帰省した際に市の広報誌に社会福祉士の募集があったから • 受験対策をしてこなかったため、学生支援課で対策本や模擬面接の支援を受け、最終試験まで突破。 • 社会福祉士の取得を条件に採用となる。 • 社会福祉士の合格が必須の目標に 
---	---

つくば市の概略（令和5年4月現在）

- 人口25万2286人 高齢化率19.21% 面積284km²（東京23区の半分）
- 日常生活圏域を7つに設定(旧町村)




	人口(人)	0～39歳	40～64歳	65歳以上	高齢化率 (%)
筑波地区	16,814	4,908	5,513	6,393	38.02
大穂地区	19,974	8,710	6,902	4,362	21.84
豊里地区	16,197	6,480	5,670	4,047	24.99
谷田部西地区	5,093	27,174	14,958	7,961	7.961
谷田部東地区	69,083	36,252	24,337	8,494	12.30
桜地区	57,229	29,136	19,620	8,473	14.81
喜嶋地区	22,896	6,775	7,391	8,730	38.13
合計	252,286	119,435	84,391	48,260	19.21

図表出典： <https://www.tsukuba-archannel.jp/page/page000015.html>


行政での仕事内容

- 最初の部署は、地域包括支援課（直営の地域包括支援センター）
 - 担当業務
 - 総合相談業務
 - 高齢者虐待対応
 - 成年後見制度首長申し立て
 - 委託地域包括支援センターの管理（業務内容の指導・委託料の支払い業務）

→行政は、「予算」をつけることで、あるべき姿に近づけていくのだと実感。



<https://www.jcsw.ac.jp/real/25.html>

<h2>行政での仕事内容</h2> <ul style="list-style-type: none"> • 令和3年度に社会福祉課保護係に異動 <ul style="list-style-type: none"> ・ 担当業務 ・ 説明するまでもなく、生活保護のケースワーカー ・ 担当ケースは、約82世帯。 ・ 毎月、30世帯を訪問しながら、必要に応じて保護費の計算を行っている。 ・ 保護費の目安は、つくば市の場合は、1人暮らしでアパートの場合10万2430円 → 生活困窮に至る理由は様々あるが、就労可能・他法他施策の利用で、生活保護を必要としない状況となるよう一つずつ、問題を解決。 ケースワークの難しさと面白さで日々忙殺。 	<h2>生活保護の概要</h2> <ul style="list-style-type: none"> 【収入と資産が一定の要件に満たない場合は保護受給可能】 • 申請に至った理由は問わない：生活保護法第2条例）失業、離婚、傷病、破産など • 活用できるものは可能な限り全て使ってもらう：生活保護法第4条例）社会保険、預貯金、土地、医療助成制度、親族による扶養（注意）「保護に優先して行われる」となっており、絶対ではない。 • 保護の程度は、厚労省の告示による：生活保護法第8条例）つくば市で生産年齢で障害認定等がなく、賃貸物件の場合→102,430円(生活費68,430円+家賃34,000円)+医療費
--	--

つくば市の生活保護の概況(令和5年3月)

区分	人口	被保護世帯数	被保護人員	保護率 (%)
つくば市	252,590	1,055	1,252	4.90
参考：茨城県全体	2,833,144	23,728	28,785	10.20
参考：全国	令和5.3現在	1,647,341	2,027,865	16.30

世帯累計	世帯数	構成比	全国の構成比
高齢者世帯	549	52.9	55.6
母子世帯	27	2.6	4.0
障害者世帯	123	11.9	13.3
傷病者世帯	165	15.9	11.6
その他世帯	173	16.7	15.6
合計	1,037	100	100

査察指導員(係長) 2名
 地区担当員(現業員)14名
 庶務・経理担当 2名
 就労支援員等 3名
 で1,055世帯の生活を支え、
 自立に向けて支援しています。

自分にとってソーシャルワークとは

本人の望む生活像を引き出し、安心して生活できる環境を整えること

関係機関との連携も重要だが、本人との対話の中で、
ふとしたタイミングで本人の望む生活や強みを見つけることも

本人の望む生活という「ジグソーパズル」を完成させるため
生活課題という「パズルのピース」を可視化することが役割

ただし、そのピースをはめるのは本人で状況に応じて、
その支援をする必要がある。

「パズルのピース」がはまらずハマらず、課題が解決できないときは、
再度、アセスメントを行い、本人の意志やソーシャルワーカーの
見立てに誤りがある。生活課題という「パズルのピース」を見立てる
力が必要

社大福祉フォーラム2023 シンポジウム ～誰一人取り残さないソーシャルワーク～

令和5年6月25日
東日本少年矯正医療・教育センター
福祉専門官 天宮 陽子

自己紹介

日本社会事業大学

社会福祉学部 (旧) 児童福祉学科 介護福祉コース 卒

生活介護施設で非常勤職員
訪問介護事業所に就職。その後転職 養護老人ホーム、
宿所提供施設

福祉を仕事にすることに
疑問を感じ、就職せず
タイに行く。

自身の知識不足を感じて
通信教育科を受講。資格も取得。

もやもやして
専門職大学院に入学。

平成27年 神奈川医療少年院

平成31年 東日本少年矯正医療・教育センター

東日本少年矯正医療・教育センター①

関東医療少年院と神奈川医療少年院を移転・統合して、平成31年に4月に設立され
た少年院（東京都昭島市）。

収容区域は、東日本全域（北海道、東北、関東甲信越及び静岡）

種類	矯正教育課程	性別
第1種	支援教育課程Ⅰ・Ⅱ（N1、N2）	男
第2種	支援教育課程Ⅳ・Ⅴ（N4、N5）	男
第3種	医療措置課程（D）	男女
第4種	受刑在院者課程（J）	男女
第5種	保護観察復帰指導課程（P1、P2）	男女

私はこちらを担当



東日本少年矯正医療・教育センター②

- 様々な専門職（法務教官、法務技官（心理）、医師、看護師、臨床心理士
など）との連携
- 福祉専門官（非常勤社会福祉士、精神保健福祉士）は主に社会復帰支援を
担当。
- 社会復帰支援とは・・・
少年院法44条に定められ、円滑な社会復帰をすすめるために修学支援、
就労支援、福祉支援が行われている。福祉専門官は福祉支援を担当して
いる。
- 支援の流れ
面接⇒個人情報同意書取得⇒窓口へ相談⇒関係機関との面接
⇒見学や体験など

少年院のソーシャルワーク

少年院はそもそも福祉の窓口でも施設でもない場所・・・。

社会の窓口との
仲介的役割

- そこでの福祉ニーズは
- ・本人や家族からの相談（以前から、福祉サービスを利用しており、入所による手続
の相談、またサービスを利用しようと思っていたなど）
 - ・保護観察所や寮の法務教官からの依頼（入院することで、帰る場所がなくなって
しまった。集団生活の中で福祉的な課題がある場合など。）
 - ・記録や生活の様子から何となく気になる

アウトリーチ

（そもそも生活が社会から隔たれるために生じることで、社会福祉士とし
ては気になることがあるが、何も本人からは困る様子が聞かれない。
また入所前の状況から制度を利用してよいと思われるのに利用して
いないなど。）

少年院（アウトリーチ）で感じたこと

福祉制度とつながるのが難しい状況がある？

福祉制度を利用する場合・・・

→受付窓口に行く（自分の状況に気が付く、周りに気が付いてく
れる人がいる。）

（窓口を知っているもしくは知っている人がいる。）

→窓口で相談する（自分の困っていることを話すことができる。
＝状況を受け入れることができている。）

と同時に
本人が困っていない、何となく困りそう、なんとなく気がかけてほしいでは、
相談窓口にはつながらないという現実もある！？

困ること、つら
い、何かを頼る
ということに抵抗
感、拒否感を持
っている人が
いる。

誰一人取り残さないソーシャルワークとは・・・

つらい、困っても大丈夫だと思える対応をする。

寄り添う、気にかける。近くにいることを伝える。

専門職からニーズをつかみにいく。

ご清聴ありがとうございました。



(精神保健福祉士短期養成 2018年卒)

◎BOND～外国人労働者・難民と共に歩む会～ メンバー
◎入管収容問題を考えるソーシャルワーカーネットワーク 事務局

●総在留外国人 307万5,213人 ※195か国
(令和4年末、前年末比約31万人、11.4%+)

●非正規滞在外国人 7万491人
(令和5年1月1日現在、前年同日比約3,732人、5.6%+)
被收容者・仮放免者(收容令書、退去強制令書)
送還忌避者 4,233人 ← 国会で入管法改正案が強硬採決

6月9日改正入管法成立
(改悪案)

- ㊦低い難民認定率を改善しないまま、難民申請者を強制送還できる仕組みを設ける。
- ㊧難民など帰国できない事情がある人に帰国を命じ、彼等とない処遇する。
- ㊨在留資格のない外国人に対する無期限・長期收容の制度を維持する。
- ㊩新設の監視措置を通じて、收容から解放された人への監視を強める。就労を禁止された対象者に生活保障を行わない。
- ㊪在留資格のない人への在留特別許可による救済を狭める。

出所: <https://chng.it/Qn8MD656sg> より転載



The flowchart illustrates the process for individuals with irregular immigration status in Japan. It begins with a box labeled '入管法違反 非正規滞在者' (Violation of Immigration Act, Irregular Stayers). An arrow points to '退去強制命令' (Removal Order). From there, the process branches into three paths: 1) '在留特別許可' (Special Permission to Stay), which is linked to a list of four conditions: ① Major life in Japan, ② Marriage with a foreigner, ③ Asylum application, and ④ Adult dependents, with a note '法務大臣の裁量' (Discretion of the Minister of Justice). 2) '強制送還 (9割以上帰国)' (Compulsory Return (90%+ return to home country)). 3) '強制收容' (Compulsory Detention), which includes '全件收容、無期限、司法審査無し' (All cases detained, indefinite, no judicial review). A red arrow points from '強制收容' to '仮放免' (Provisional Release), which includes '就労×、保護×、移動制限' (No work, no protection, movement restrictions).

```

graph LR
    A[入管法違反  
非正規滞在者] --> B[退去強制命令]
    B --> C[在留特別許可]
    B --> D[強制送還  
(9割以上帰国)]
    B --> E[強制收容]
    E --> F[仮放免]
  
```

①人生の大半を日本で過ごす移住労働者
②日本人または在留資格のある外国人と結婚をしている
③難民認定申請者
④未成年の仮放免者
【収容と仮放免】

法務大臣の裁量

在留特別許可

強制送還
(9割以上帰国)

強制收容

全件收容、無期限、司法審査無し

仮放免
(就労×、保護×、移動制限)

出所: <https://www.refugees.or.jp/refugees/japan-recog/>
 出所: <https://www.refugees.or.jp/refugees/japan-recog/> 認定者 202



出所: <https://mainichi.jp/articles/20230615/k00/00m/040/135000c>
毎日新聞より転載

出所：<https://wpb.shueisha.co.jp/news/politics/2023/06/05/119642/>
週刊J-NEWSより転載



2020年3月に2年以上もの長期収容から解放された、出された日本人妻と結婚するウルグァ人のデニズさん。しかし、これまで難民認定申請を4回しており、今回の入籍法改正が成立すれば、強制退避の対象になる可能性がある。

夫に在留資格がなく、十分な家庭生活を送れない
ことな状況を示すものである。日本人男性が「奥（
他姓者）の生活習慣を要する日本人配偶者の存在」
を成して子供が育った。出入国在留管理庁の調査へ教育
費、医療費の負担が加えられて、在留資格のない夫
に行動の自由が制限されたりなどの実がある女性
10人を取り調べ、「昔ながらきたりたけりたの」とい
て、社会やネットを通じて知恵の問題点を訴えている。異
性から「異国人に対する不協和分、配膳者」となった
夫の中傷が深刻な脅威を及ぼしている」と入国管理局制
度改善を訴える声もある。（『読者』2012年）



出所：<https://www.tokyo-np.co.jp/article/182577>
東京新聞上日紙載

日本で生まれ、日本で育ってきたにも関わらず、親が在留を認められていないことから、子どもも日本政府から「日本から出ていけ」として強制送還の対象になっています。在留が認められなければ、将来働くこともできない、社会保険にも加入できない、許可がなければ県外に出られない等、日本で生きるための権利が認められない状態で生活を強いられます。



出所: <https://www.buzzfeed.com/jp/sumirekotomita/painting-essay-kid>
「実家という」といいたい！子どもたちの「引き」 隠された非難な思いとい



出所: <https://chng.it/B94RqkJ5wP> オンライン署名
「日本に生まれ育った未成年の仮放免者とその家族に在留特別許可を！」

送還忌避者ではなく「帰れない」人たち

◎ 退去強制令書を発布された人の9割以上は帰国

◎ 政府・入管が定義する送還忌避者

⇒ 実際にはどうしても帰国できない事情を抱えた人たち

テロリスト、日本の治安を脅かすような存在？

※社会正義、人権、尊厳の保持、多様性の尊重、命を守る視点
ソーシャルワーカーはどう取り組んできたか？

実践①収容所への面会活動（ミクロ）

◎ 無期限の長期収容

再収容の恐れ、仮放免でいつ出られるか

◎ 処遇の問題

衛生・栄養面、行動制限

面会・電話の制限、精神・身体的な制圧

◎ 医療の問題

拘禁症状、施設症化、自殺・自殺未遂

医療へのアクセスが不十分



入管収容施設での死亡事例（2007.2月～2021.3月）

順位	発生年月	国籍	性別・年齢	死因	収容施設
1	2007年2月	ガーナ	男性・50代	肺炎	東京
2	2008年1月	インド	男性・20代	脳死（自殺）	西日本
3	2009年3月	中国	男性・30代	脳死（自殺）	東京
4	2010年2月	ブラジル	男性・20代	非正常脳死（自殺）	東日本
5	2010年4月	韓国	男性・40代	脳死（自殺）	東日本
6	2010年4月	フィリピン	女性・50代	不明	東京
7	2010年12月	フィリピン	女性・50代	急性心筋梗塞	東京
8	2013年10月	ミャンマー	男性・50代	くも膜下出血	東京
9	2014年3月	イラン	男性・30代	低酸素性脳症	東日本
10	2014年3月	カメルーン	男性・40代	肺炎	東日本
11	2014年11月	スリランカ	男性・50代	急性心筋梗塞	東京
12	2017年3月	ベトナム	男性・40代	くも膜下出血	東日本
13	2018年4月	インド	男性・30代	脳死（自殺）	東日本
14	2018年11月	中国	男性・60代	多臓器不全	福岡
15	2019年6月	タイジャニア	男性・40代	糖尿病	大村
16	2020年10月	インドネシア	男性・30代	不明	名古屋
17	2021年3月	スリランカ	女性・30代	不明	名古屋

出所：https://note.com/narmin.bond/n/nd32048096cd24 BOND＝外国人労働者・難民と共に歩む会～

実践②仮放免者とののかかわり（ミクロ）

仮放免：病気やその他やむを得ない事情を考慮して、一定の条件
の下で一時的に収容を停止する制度。

- ・働くことを禁止
- ・住民登録がされない
- ・社会保障から排除
- ・居住都道府県以外への
- ・移動制限
- ・定期的な出頭義務
- ・常に監視

生存権に
かかわる問題

『生きていけないー追い詰められる
仮放免者ー』仮放免者生活実態調査
実施団体：NPO法人北関東医療相談会

ケース概要

- 約10年前に来日
- 両親は母国に、姉は日本で生活兄は他界
- 難民認定申請中
- 特定活動を更新できなくなり、非正規滞在に

A氏（男性）
40代前半
アジア出身

普通の暮らしがしたい
ボランティアがしたい
信頼される人間になりたい

- 糖尿病、喘息
- アルコール依存症（来日前から）
- 2年半長期収容
- 仮放免での生活
- 5カ国語できる

帰国したくてもできない・基礎疾患と依存症あり
仮放免という不安定な立場のA氏にどのようにかかわったか

※事例等の使用は2022年2月に対象者の承諾を口頭で得ています。

非営利の社会資源

無料低額診療事業 NPO・NGO

エコマップ
（仮放免者）

営利の社会資源

仮放免＝就労不可・国民健康保険加入不可・移動制限

住民登録がされないため、様々な社会保障・社会福祉制度を利用できない。誰ともつながることができず、人知れずにくる方も・・・

近隣住民

宗教施設 友人・知人

個人的な社会資源

警察

入管

公的な社会資源

精神科の自立支援医療

ストレングスに着目したかわり



マリンダさんによる

スリランカ料理教室

2022年11月27日（日）
12時～15時
◎日本橋キッチンスタジオ
会費：1,500円
（場所代・材料費）
主催：入管収容問題を考えるSWNW



定員：15名（スタッフ込み）
申込：https://forms.gle/3d4d4d4d4d4d4d4d
★Googleフォームにてお申込みください

発熱（37.5℃以上）や咳、咽痛等の症状がある方の参加は原則としてお断りします。マスク着用、手消毒、検温にご協力ください。定期的に窓を開け換えます。

当日調理するメニュー
エッグポッター、サンボール、コットウ
チキンカレー、ダムカレー
★材料の関係により変更となる可能性あり



繰り返される収容と仮放免

収容所へ
の面会

- ・被収容者と面会、ラポールの形成
インテーク、アセスメント、アドボカシー
- ・収容所内での人権侵害を監視する
（ブラックボックス化を防ぐ）

仮放免後の
かわり

- ・住まい、食料、医療（無料低額診療）等の調整
- ・日中活動（ストレングス、エンパワメント）
- ・孤立化防止、地域でのネットワーク構築

仮放免中は定期的に入管に出向く必要がある。そこで更新できるかどうか？多くの仮放免者はこの日が近づいてくると、再収容されないか心配で眠れないと言う。面談の際には毎回帰国の意思を確認されたり、人権侵害と捉えられる言葉を言われることも多くある。

日本の恣意的拘禁

◎恣意的拘禁とは

恣意的拘禁（しいてきこうきん）とは、国際法で禁止された身体拘束のこと。

◎日本の身体拘束

日本で行われている主な身体拘束

- ・刑事拘禁（未決拘禁、既決拘禁）
- ・入管収容（全件収容、司法審査なし、無期限）
- ・精神科医療の強制入院（広範な入院開始要件）

※国連の特別報告者、恣意的拘禁作業部会からの2023年入管法改定案に関する懸念表明と対話を求める共同書簡

国連人権委員会（自由権規約委員会）

国連・自由権規約委員会は11月3日、日本国内の人権状況について「[総括所見](#)」を発表した。この中で委員会は、入管の収容施設において外国人が劣悪な健康状況に置かれていることや、収容施設から仮放免を受けた人が収入を得られず困窮していることなどに懸念を示し、日本政府に改善を図るよう勧告した。（出所：https://www.theheadline.jp/articles/758 The HEADLINEより転載）

- ① 国際的な基準に沿った難民保護法制の採用
- ② 収容施設での処遇の改善
- ③ 仮放免中の生活状況の改善
- ④ ノンフルマン原則の尊重と難民審査での司法アクセスの確保
- ⑤ 収容の代替措置や上限期間、司法審査の導入
- ⑥ 庇護申請者の権利尊重のため、入管職員への訓練の実施

実践③地域での活動（メゾ）

- ◎図書館を利用できるようにする。（武蔵野市）
住所が確認できるものが必要。仮放免許可書で大丈夫か？
- ◎住んでいる地区のボランティアセンターでボランティア相談をする。
夏ボラ体験から定期的なボランティアへ
生活困窮者へ配布するお弁当づくり
教会で実施している車椅子の掃除や整備
（武蔵野市、中野区、練馬区）
- ◎社会福祉協議会に食料支援、住まいや生活の相談
（武蔵野市、練馬区）



実践③地域での活動（メゾ）

- ◆ボランティア相談からつながった支援の輪
「何かできること、ボランティアを探している。」



「仮放免の方が来るのは初めてです。家や生活もっと困っていることがあるんじゃないですか？大丈夫ですか？」



シェルター期限前に、この地域内で部屋を貸してくれるオーナーさんとの出会い。仮放免者も地域で暮らしている、入管行政に関する問題について学習会の開催。地域生活にあたって、本人との継続的ななかかわり、本人・支援者とのカンファレンス。

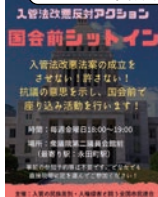
実践④での活動（マクロ）

ミャンマーの現在やロヒンギャ難民の状況、入管法改悪の緊迫した状況報告を市民に向けて。会場には120名。



実践④での活動（マクロ）

2月から毎週金曜日18時～19時、衆議院第二議員会館前19回連続で「入管法改悪反対アクション」を実施。当事者、支援者、市民、国会議員、メディアと連帯

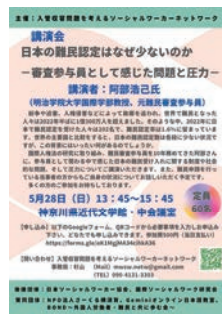
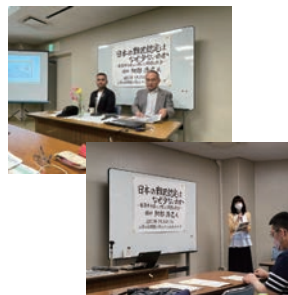


実践④での活動（マクロ）



当ネットワークのメンバーが「練馬でもスタンディングをやる」と提案、5月24日から毎日実施。毎回ソーシャルワークのグローバル定義や原理原則をもとに「入管法改悪反対」の声をあげた。

#入管法改悪反対
#入管法改悪反対アクション
毎日スタンディング
@練馬駅周辺
18:30～19:30頃
5/24(土)・練馬駅周辺
5/25(日)・練馬駅周辺
5/26(月)・練馬駅周辺
5/27(火)・練馬駅周辺
5/28(水)・練馬駅周辺
5/29(木)・練馬駅周辺
5/30(金)・練馬駅周辺
5/31(土)・練馬駅周辺
6/1(日)・練馬駅周辺
6/2(月)・練馬駅周辺
6/3(火)・練馬駅周辺
6/4(水)・練馬駅周辺
6/5(木)・練馬駅周辺
6/6(金)・練馬駅周辺
6/7(土)・練馬駅周辺
6/8(日)・練馬駅周辺
6/9(月)・練馬駅周辺
6/10(火)・練馬駅周辺
6/11(水)・練馬駅周辺
6/12(木)・練馬駅周辺
6/13(金)・練馬駅周辺
6/14(土)・練馬駅周辺
6/15(日)・練馬駅周辺
6/16(月)・練馬駅周辺
6/17(火)・練馬駅周辺
6/18(水)・練馬駅周辺
6/19(木)・練馬駅周辺
6/20(金)・練馬駅周辺
6/21(土)・練馬駅周辺
6/22(日)・練馬駅周辺
6/23(月)・練馬駅周辺
6/24(火)・練馬駅周辺
6/25(水)・練馬駅周辺
6/26(木)・練馬駅周辺
6/27(金)・練馬駅周辺
6/28(土)・練馬駅周辺
6/29(日)・練馬駅周辺
6/30(月)・練馬駅周辺
7/1(火)・練馬駅周辺
7/2(水)・練馬駅周辺
7/3(木)・練馬駅周辺
7/4(金)・練馬駅周辺
7/5(土)・練馬駅周辺
7/6(日)・練馬駅周辺
7/7(月)・練馬駅周辺
7/8(火)・練馬駅周辺
7/9(水)・練馬駅周辺
7/10(木)・練馬駅周辺
7/11(金)・練馬駅周辺
7/12(土)・練馬駅周辺
7/13(日)・練馬駅周辺
7/14(月)・練馬駅周辺
7/15(火)・練馬駅周辺
7/16(水)・練馬駅周辺
7/17(木)・練馬駅周辺
7/18(金)・練馬駅周辺
7/19(土)・練馬駅周辺
7/20(日)・練馬駅周辺
7/21(月)・練馬駅周辺
7/22(火)・練馬駅周辺
7/23(水)・練馬駅周辺
7/24(木)・練馬駅周辺
7/25(金)・練馬駅周辺
7/26(土)・練馬駅周辺
7/27(日)・練馬駅周辺
7/28(月)・練馬駅周辺
7/29(火)・練馬駅周辺
7/30(水)・練馬駅周辺
7/31(木)・練馬駅周辺
8/1(金)・練馬駅周辺
8/2(土)・練馬駅周辺
8/3(日)・練馬駅周辺
8/4(月)・練馬駅周辺
8/5(火)・練馬駅周辺
8/6(水)・練馬駅周辺
8/7(木)・練馬駅周辺
8/8(金)・練馬駅周辺
8/9(土)・練馬駅周辺
8/10(日)・練馬駅周辺
8/11(月)・練馬駅周辺
8/12(火)・練馬駅周辺
8/13(水)・練馬駅周辺
8/14(木)・練馬駅周辺
8/15(金)・練馬駅周辺
8/16(土)・練馬駅周辺
8/17(日)・練馬駅周辺
8/18(月)・練馬駅周辺
8/19(火)・練馬駅周辺
8/20(水)・練馬駅周辺
8/21(木)・練馬駅周辺
8/22(金)・練馬駅周辺
8/23(土)・練馬駅周辺
8/24(日)・練馬駅周辺
8/25(月)・練馬駅周辺
8/26(火)・練馬駅周辺
8/27(水)・練馬駅周辺
8/28(木)・練馬駅周辺
8/29(金)・練馬駅周辺
8/30(土)・練馬駅周辺
8/31(日)・練馬駅周辺
9/1(月)・練馬駅周辺
9/2(火)・練馬駅周辺
9/3(水)・練馬駅周辺
9/4(木)・練馬駅周辺
9/5(金)・練馬駅周辺
9/6(土)・練馬駅周辺
9/7(日)・練馬駅周辺
9/8(月)・練馬駅周辺
9/9(火)・練馬駅周辺
9/10(水)・練馬駅周辺
9/11(木)・練馬駅周辺
9/12(金)・練馬駅周辺
9/13(土)・練馬駅周辺
9/14(日)・練馬駅周辺
9/15(月)・練馬駅周辺
9/16(火)・練馬駅周辺
9/17(水)・練馬駅周辺
9/18(木)・練馬駅周辺
9/19(金)・練馬駅周辺
9/20(土)・練馬駅周辺
9/21(日)・練馬駅周辺
9/22(月)・練馬駅周辺
9/23(火)・練馬駅周辺
9/24(水)・練馬駅周辺
9/25(木)・練馬駅周辺
9/26(金)・練馬駅周辺
9/27(土)・練馬駅周辺
9/28(日)・練馬駅周辺
9/29(月)・練馬駅周辺
9/30(火)・練馬駅周辺
10/1(水)・練馬駅周辺
10/2(木)・練馬駅周辺
10/3(金)・練馬駅周辺
10/4(土)・練馬駅周辺
10/5(日)・練馬駅周辺
10/6(月)・練馬駅周辺
10/7(火)・練馬駅周辺
10/8(水)・練馬駅周辺
10/9(木)・練馬駅周辺
10/10(金)・練馬駅周辺
10/11(土)・練馬駅周辺
10/12(日)・練馬駅周辺
10/13(月)・練馬駅周辺
10/14(火)・練馬駅周辺
10/15(水)・練馬駅周辺
10/16(木)・練馬駅周辺
10/17(金)・練馬駅周辺
10/18(土)・練馬駅周辺
10/19(日)・練馬駅周辺
10/20(月)・練馬駅周辺
10/21(火)・練馬駅周辺
10/22(水)・練馬駅周辺
10/23(木)・練馬駅周辺
10/24(金)・練馬駅周辺
10/25(土)・練馬駅周辺
10/26(日)・練馬駅周辺
10/27(月)・練馬駅周辺
10/28(火)・練馬駅周辺
10/29(水)・練馬駅周辺
10/30(木)・練馬駅周辺
10/31(金)・練馬駅周辺
11/1(土)・練馬駅周辺
11/2(日)・練馬駅周辺
11/3(月)・練馬駅周辺
11/4(火)・練馬駅周辺
11/5(水)・練馬駅周辺
11/6(木)・練馬駅周辺
11/7(金)・練馬駅周辺
11/8(土)・練馬駅周辺
11/9(日)・練馬駅周辺
11/10(月)・練馬駅周辺
11/11(火)・練馬駅周辺
11/12(水)・練馬駅周辺
11/13(木)・練馬駅周辺
11/14(金)・練馬駅周辺
11/15(土)・練馬駅周辺
11/16(日)・練馬駅周辺
11/17(月)・練馬駅周辺
11/18(火)・練馬駅周辺
11/19(水)・練馬駅周辺
11/20(木)・練馬駅周辺
11/21(金)・練馬駅周辺
11/22(土)・練馬駅周辺
11/23(日)・練馬駅周辺
11/24(月)・練馬駅周辺
11/25(火)・練馬駅周辺
11/26(水)・練馬駅周辺
11/27(木)・練馬駅周辺
11/28(金)・練馬駅周辺
11/29(土)・練馬駅周辺
11/30(日)・練馬駅周辺
12/1(月)・練馬駅周辺
12/2(火)・練馬駅周辺
12/3(水)・練馬駅周辺
12/4(木)・練馬駅周辺
12/5(金)・練馬駅周辺
12/6(土)・練馬駅周辺
12/7(日)・練馬駅周辺
12/8(月)・練馬駅周辺
12/9(火)・練馬駅周辺
12/10(水)・練馬駅周辺
12/11(木)・練馬駅周辺
12/12(金)・練馬駅周辺
12/13(土)・練馬駅周辺
12/14(日)・練馬駅周辺
12/15(月)・練馬駅周辺
12/16(火)・練馬駅周辺
12/17(水)・練馬駅周辺
12/18(木)・練馬駅周辺
12/19(金)・練馬駅周辺
12/20(土)・練馬駅周辺
12/21(日)・練馬駅周辺
12/22(月)・練馬駅周辺
12/23(火)・練馬駅周辺
12/24(水)・練馬駅周辺
12/25(木)・練馬駅周辺
12/26(金)・練馬駅周辺
12/27(土)・練馬駅周辺
12/28(日)・練馬駅周辺
12/29(月)・練馬駅周辺
12/30(火)・練馬駅周辺
12/31(水)・練馬駅周辺



高齢者人権保障に対する課題

高齢者人権保障に対する課題

高齢者人権保障に対する課題

2023年に関しては、困窮者支援団体、平和・人権団体による「入管法改定案の廃案を強く求める共同声明」の賛同団体となっています。

ソーシャルワーク実践の課題

- 現行制度の中で基本的人権及び生存権が十分に保障されていない人々への視点。『誰一人取り残さない』
- 人権保障・生活関連施策の改善に向けたアドボカシーやソーシャルアクションの展開。制度の柔軟な運用に対しての交渉。

● ストレngths、エンパワメントの視点。生きる・住む場所が変わっても、その人らしく暮らせるように。

ソーシャルアクション

「人権と社会正義をよりどころにし、社会的排除・抑圧の問題を解決するために、社会的弱者・地域住民・個人・集団のニーズに応じて、当事者・家族・市民・コミュニティなどと連帯し、一般市民の意識を喚起しながら、社会福祉関係者や多種多様な専門職とも組織化し、国や地方自治体など行政や議会などに働きかけて、法律・制度・サービスの改善や拡充や創設を求めたり、新たな取り組みを展開したりする、ソーシャルワークの価値と倫理を根本とした活動実践や運動あるいは援助技術である。」

引用：日本社会福祉学会辞典編集委員会編 『社会福祉学辞典』 丸善出版（2014）

ミクロ・メゾ・マクロの連続した実践

ミクロ：目の前にいる当事者の声を聞き、個々の問題の解決
メゾ：集団、地域での課題の抽出
マクロ：当事者の背景にある構造的な問題に対して働きかける

※ケースワーク、グループワーク、コミュニティワーク
※社会環境の把握、構造的に問題をとらえ、アプローチをしていく

ソーシャルワーク専門職のグローバル定義

ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。

社会正義、人権、集団の責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。

ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。

この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい。

忘れてはいけない視点

● 移住トランジション複雑化リスク状態
Risk for complicated immigration transition

移民としてトランジションにおける、不満足な結果や文化的障壁に対して、否定的な感情（孤独感、恐怖、不安）を経験しやすく、健康を損なうおそれのある状態。（出所：NANDA-I 看護診断 定義と分類 2018-2020 原著第11版 医学書院 2018 391頁より転載）

移住の経験は、健康とウェルビーイングを決定する重要な要素です。難民や移民は、身体的・精神的な健康問題が頻繁に起こるにもかかわらず、しばしば外国人恐怖症、差別、劣悪な生活・住居・労働条件、保健サービスが十分に利用できないなどの問題に直面しており、社会の最も脆弱なメンバーの一人なのです。（出所：https://japan-who.or.jp/news-releases/2203-13/ 公益社団法人日本WHO協会より転載）

◎トラウマインフォームドケア（TIC）の視点

誰一人取り残さない

ソーシャルワーク

国や行政の政策をしっかりと「弱者の立場から」とらえて、社会をより良く変革していこうという実践的学問、目的は社会変革。

国籍、在留資格の有無で区別することなく、彼らの社会経済的正義の促進を追求する。人権と生活の質を制限する状況を阻止するという原則。

※独力で非正規滞在外国人の不安定な状況を解決することは不可能
⇒クライアントや地域の機関等を協働して、問題解決に向けた努力をすることはできる。（ネットワークの重要性）

出所：明石書店「ダイレクト・ソーシャルワークハンドブック 対人支援の理論と技術」第1章より抜粋

私なりの整理・・・



- ・やはり、ミクロレベルの問題とマクロレベルの問題はつながっている。

誰一人取り残さないの実現に向けて・・・

★インボランタリー・クライアント（自ら支援を望まない人たち）あるいは、周縁化された人たち（当たり前の権利が得られない人たち）の存在

- ・ソーシャルワークはこうした人たちに対して、何ができるのか、何をすべきなのか、こうした人たちを0（まさに誰一人取り残さない）にすることは可能なのか？

★自立とは何か（言葉のとおり、本当に「自分（一人で）立つ（独り立ちする）」ということなのだろうか）

- ・ソーシャルワークの支援目標として良く掲げられる「自立」とは何だろうか、ソーシャルワークはそうした（登壇者の皆様が考える）「自立」に向けて何ができるだろうか？